古い文献に書かれた「田島町」

2024年8月

田島町町会

はじめに

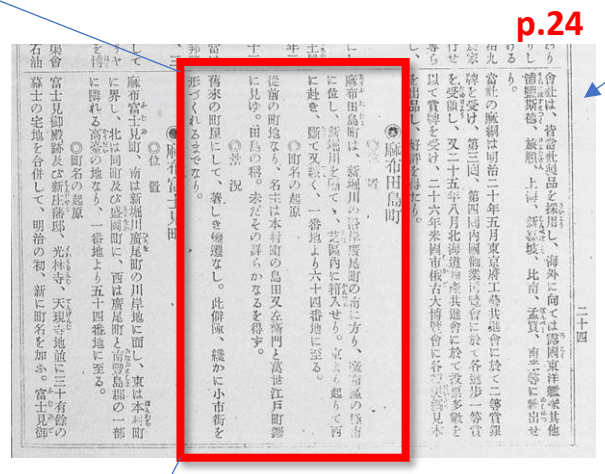
- 私たちが住む「田島町」は、江戸時代・正徳～享保年間（1711～1736頃）に成立し、それ以降の古地図、古文書、歴史書などに度々登場しています。
- また田島町町会については、大正12年（1923）の関東大震災からの復興を目的に地域住民が団結して結成されたもので、それ以降の町会活動についても公文書に残されています。田島町町会は戦後の一時期、「田島町睦会」の名で活動し、昭和36年（1962）の会館落成を機に再度名称を「田島町町会」に戻したようです。
- 今回、国立国会図書館のデータベースから、田島町に関する記録を検索し、田島町町会所蔵の資料とともに、年代順にまとめてみました。田島町の長い歴史を知る上での参考になれば幸いです。

古い文献に書かれた「田島町」(1)

1902

「新撰東京名所図会」(明治35年)

●麻布田島町
◎位置
麻布田島町は、新堀川の沿岸広尾町の南に方り、麻布区の極南に位し、新堀川を隔てて、芝区内に嵌入せり。東より起こりて西に赴き、断って又続く、一番地より六十四番地に至る。
◎町名の起源
従前の町地なり、名主は本村町の島田又左衛門と萬世江戸町鑑に見ゆ。田島の称。未だその詳らかなるを得ず。
◎景況
旧来の町屋にして、著しき変遷なし。此の僻陬、わずかに小市街を形づくれるまでなり。


麻布田島町

麻布田島町は、新堀川の沿岸廣尾町の南に方り、極南の極南に位し、新堀川を隔てて、芝區内に嵌入せり。東より起りて西に赴き、斷て又続く、一番地より六十四番地に至る。

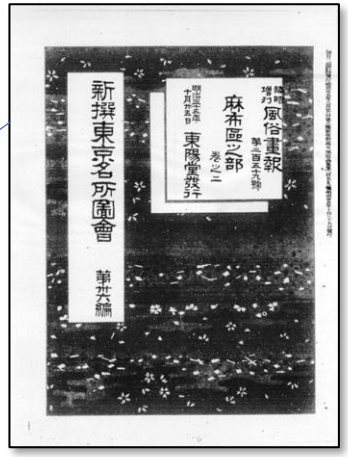
◎町名の起原

從前の町地なり、名主は本村町の島田又左衛門と萬世江戸町鑑に見ゆ。田島の稱。未だその詳らかなるを得ず。

◎景況

舊來の町屋にして、著しき變遷なし。此僻陬、纔かに小市街を形づくれるまでなり。

p.24

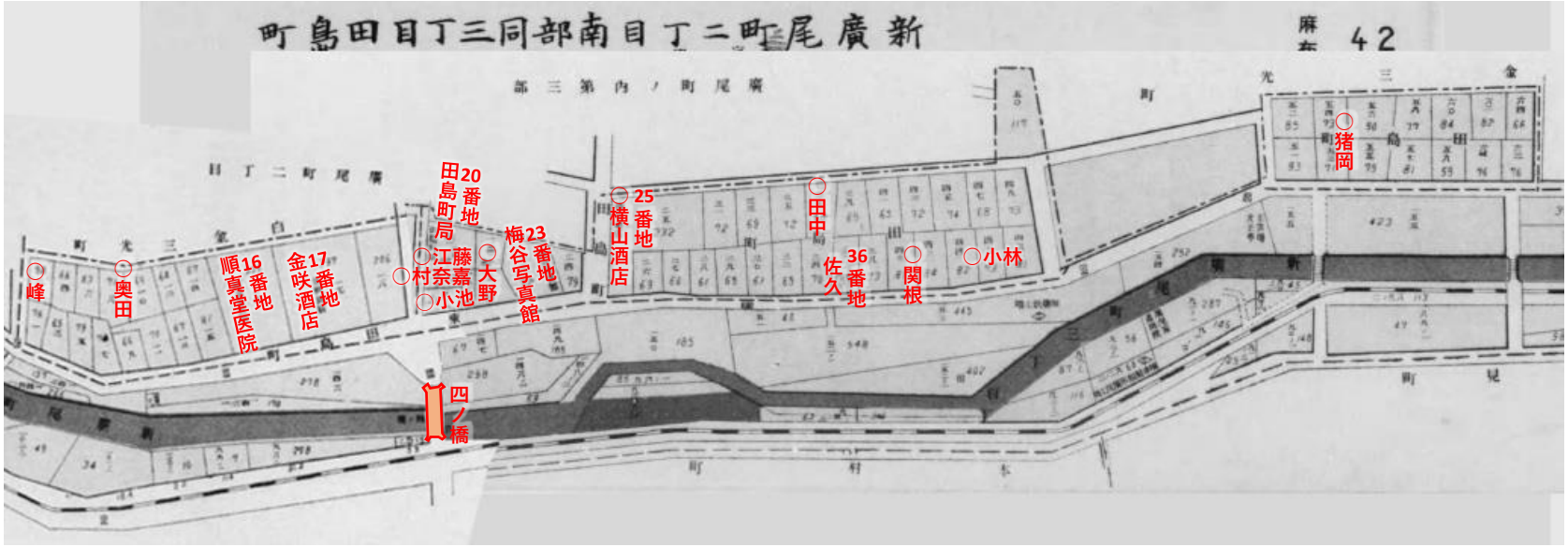


[国立国会図書館所蔵]

古い文献に書かれた「田島町」(2)

1912

「東京市及接続郡部地籍地図」(大正元年)



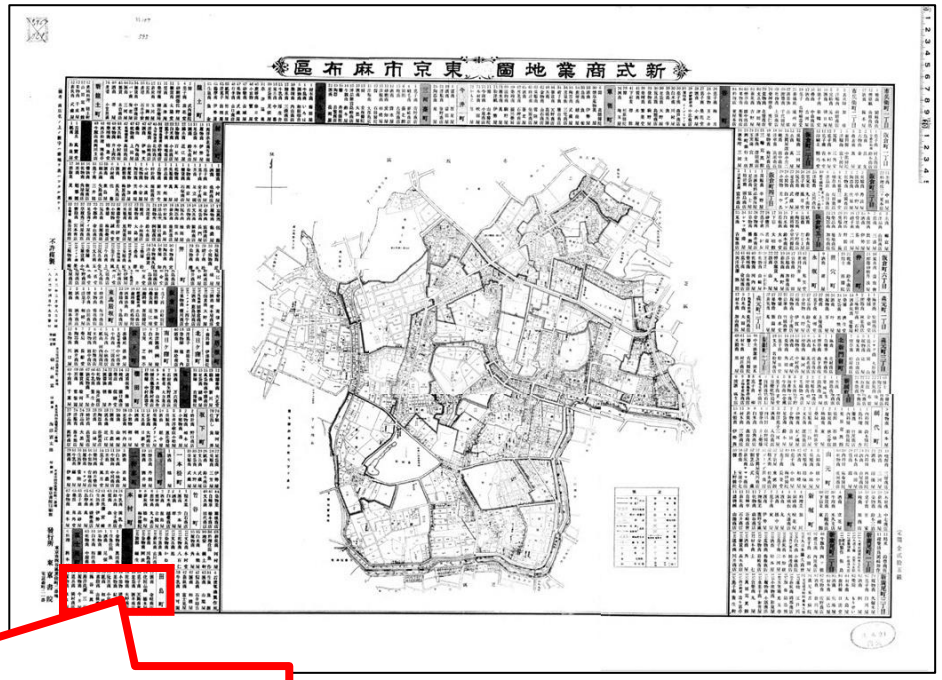
○=田島町在住地権者（地籍台帳から転記）

[国立国会図書館所蔵]

古い文献に書かれた「田島町」(3)

「新式商業地図-東京市麻布区」(大正3年)

1914



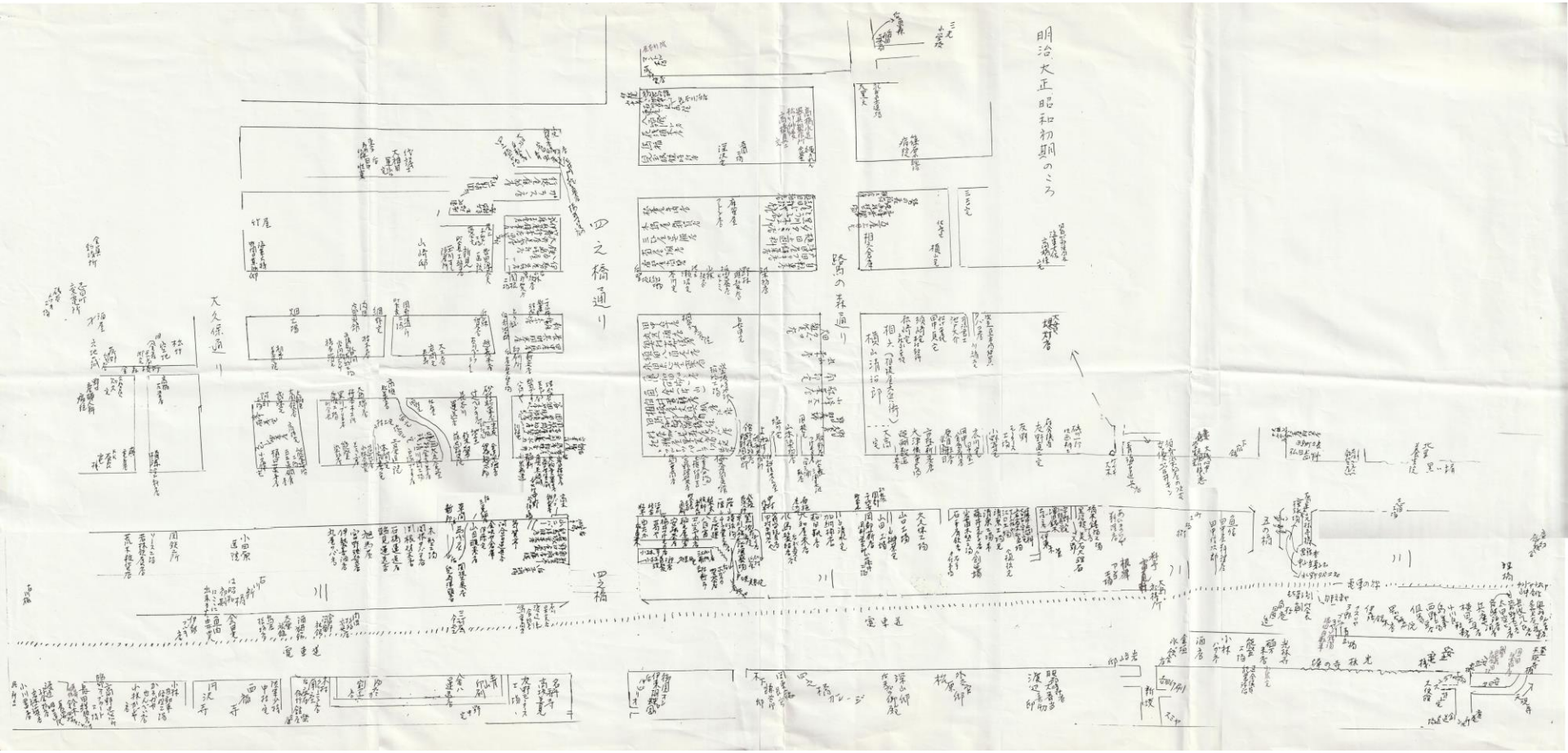
[国立国会図書館所蔵]

田島町

17	酒商	金咲商店
18	化粧品商	橋本屋
18	菓子商	天狗商会
18	足袋商	酒井商店
18	乾物商	大野商店
18	小間物	岡村商店
19	果物商	紀州屋
19	玩具商	小泉商店
20	紙商	相模屋
20	書籍商	山根書店
22	梅谷写真館	
23	西洋洗濯	三谷
23	道具商	岡村商店
24	履物商	水戸屋

古い文献に書かれた「田島町」(4)

「明治大正昭和初期の頃」



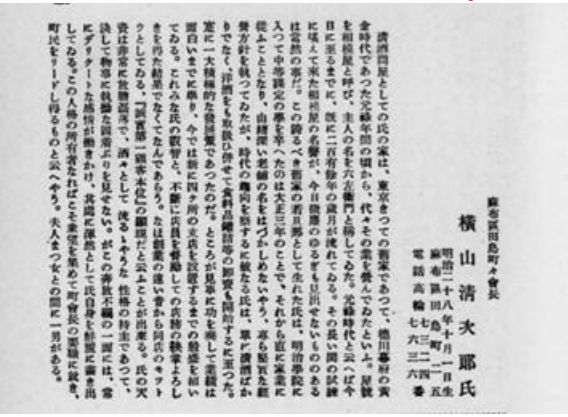
[田島町町会所蔵]

古い文献に書かれた「田島町」(5)

1926

「東京府市自治大鑑」(昭和元年)

p.119



麻布區田島町々會長

横山清次郎

明治二十八年十月一日生

麻布區田島町三十七番地

電話高輪七六三二番

横山清次郎氏（田島町25番地）

p.95

麻布區田島町會々長兼幹事

田中貞

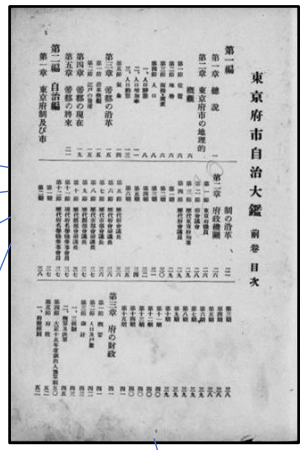
明治二十五年一月廿八日生

麻布區田島町三十七番地

電話 青山 六三二七番

田中貞氏（田島町37番地）

p.222



[国立国会図書館所蔵]

p.120

麻布區田島町々會幹事

吉原市之進

明治九年一月廿九日生

麻布區田島町一五

電話高輪五四四五番

吉原市之進氏（田島町15番地）

p.106

麻布區田島町々會幹事

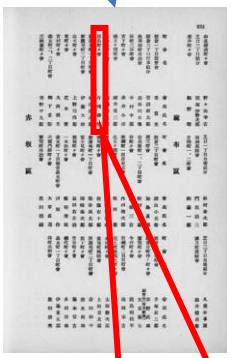
鴨島義英

明治十二年六月一日生

麻布區田島町一五

電話高輪一四三三番

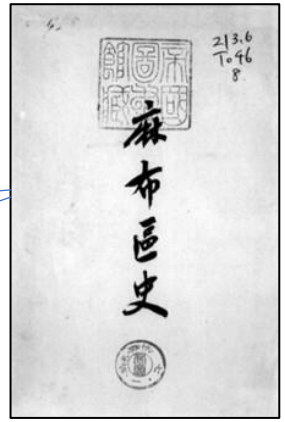
鴨島義英氏（田島町1番地）



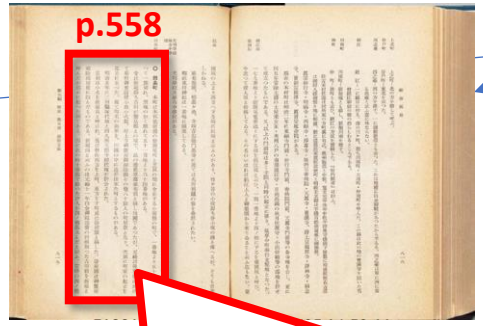
町会名	田島町町会
会長氏名	片岡静輔

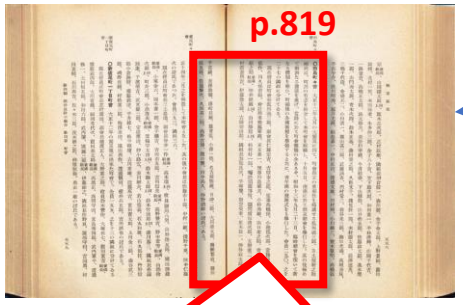
古い文献に書かれた「田島町」(6)　1941

「麻布区史」(昭和16年)



[国立国会図書館所蔵]





江藤？ ← 仁藤(*)

田島町　本町は本区最南辺の新広尾町と芝区の間に介在する小面積の町で、一番地より五十番地に至って一応切れ、飛び地のごとく離れて五十一番地より六十四番地がある。

昔は新堀即ち古川が豊島郡との境で、この辺荏原郡麻布領と称し田圃であったが、元禄以後、町屋の起立を見るに至った。従って町名の由来を、田んぼの中に島ができた町とするものがある。

明治五年に三田亀塚代地と西久保天徳寺総代地が併合された。

当初は小名を新堀向と呼ばれ、のちは俚俗西方を上町、東方を下町あるいは箒屋舗と称した。箒屋舗は御霊屋掃除頭屋敷にちなんだものである。新堀向というのは元禄十一年白金御殿造営の折、堀割った古川筋を新堀と呼んだがために起こった称である。因みにこの時十番までで終わった汐入が四ノ橋まで及んだという。当時の四ノ橋は長さ十間幅二間半ほどの板橋であったが、今はずっと短くなってしまった。

田島町町会　大正十二年九月の大震災によって、町会創立の重要性を痛感せる弘田義三郎、及び土屋新之助両氏は、町民の有志を糾合して本町会を組織し、十月五日、南座において創立総会を挙行した。その後極めて順調なる発達を遂げ、当路において町会整備の企てあるや、昭和十三年九月二十三日、臨時総会を開いて新たなる体制を整い、町関係の各種団体を整備するとともに、青年団の発団式をも挙行した。会員二五〇、これを二七の隣組に分けている。

現在役員は町会長弘田義三郎、副会長仁藤(*)定吉、吉原市之進、幹事高橋、小池、常務理事大山、川久保、会計理事斎藤、末友、理事川島、小杉、山口、青山、大貫、坪井、山川、杉村、嘱託須藤、顧問横山、友野、田中、村奈嘉、伊藤、古岡、隣組長加藤、手塚、能登、正木、神谷、大平、吉澤、湯崎、藤、小澤、名古屋、日沖、大川、醍醐、塩田、佐藤、久保、高野、濱口、田中、仲野の諸氏である。

古い文献に書かれた「田島町」(7)　1941

「市政週報」(昭和16年)

p.353

[国立国会図書館所蔵]

一組一朝一鍬一汗の奉仕 -町会会館で冠婚・葬祭-

（麻布区）田島町会

努力十五年の結晶

-如何なる場合といえども、本会の名をもって、政党政派の運動に関係することを得ず-

かつての町会役員が選挙運動などに没頭していたころ、当時常務理事であった現町会長弘田義三郎氏は、町会規約の内に特に一項を加えて、町会の内紛となりやすい問題を抑えた。その為かどうか、町会の内部は常に春風駘蕩として今日に至っている。

町会長の弘田氏は、震災の時、初めて田島町会が創立され、常務理事となって以来十五年間、孜々営々として町会のために働いて来た人である。

氏は町会役員と共に、町会内のあらゆる冗費の節約に留意し、一枚の紙、一本の鉛筆も大切にし、ガリ版など、自身で刷りながら専らその金を積むことに努力してきた。それは田島町会に会館を建てようと発心したからである。

爾来十五年間、町会長以下役員の努力と精神が結晶して、町会館建設の運びに至り、昭和十二年にめでたく竣功した。工費一万円木造二階建て、五十七坪の建物で、二階の会議室には有馬大将の忠孝の軸を掛けた床の間があり、四十畳敷の立派なものである。

町会会館で結婚式

この会議室を利用して、町会は生活改善に乗り出した。町会常会や隣組常会に利用するのは勿論、広く会員に開放して、結婚式にも使い、法事、会合、人寄せなどに利用し、冗費節約に役立つことは所期の目的以上である。この会館を人生のスタートとし、この神前に結婚式をあげた夫婦がすでに二十五組にも達している。町会役員十五年を努力が、このような成果を上げたのである。感慨察するに余りあるものだ。

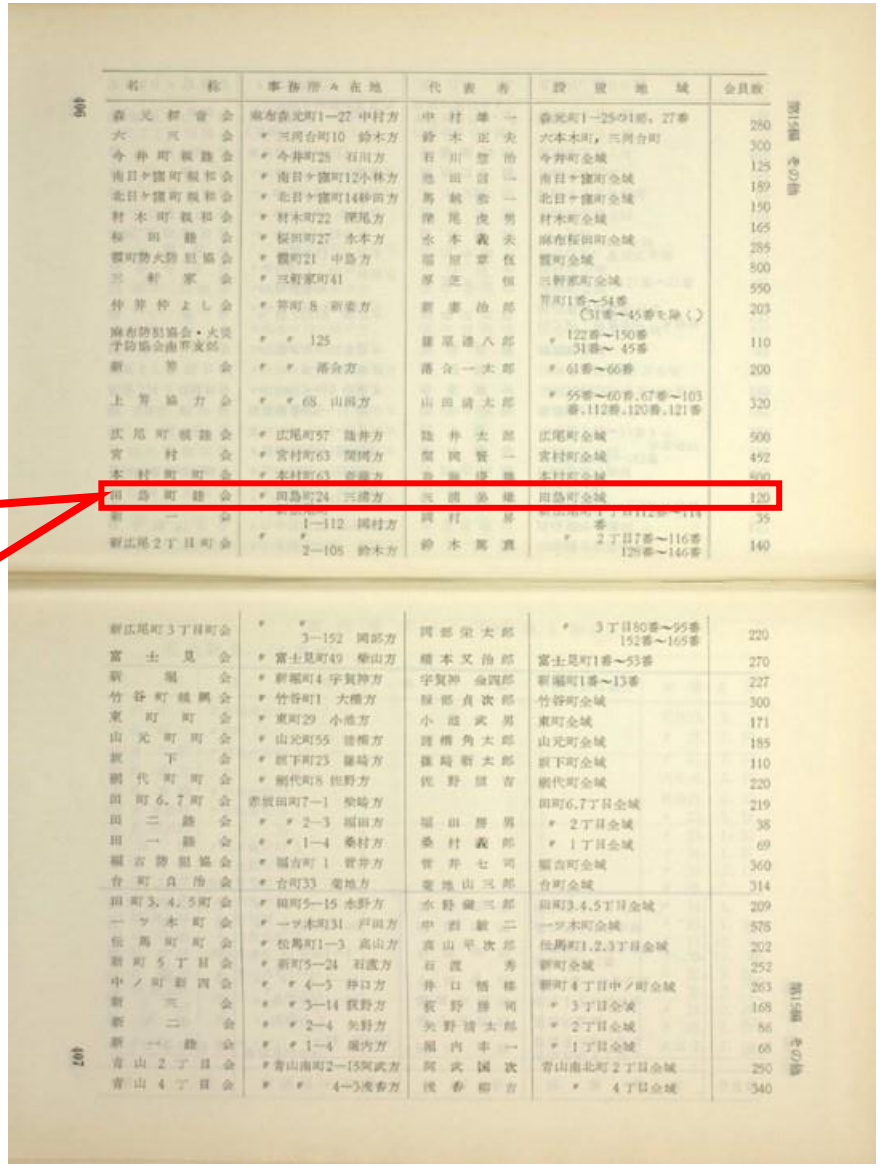
町会費一口二十銭で、比較的恵まれない町会である。しかし、それを補って余りあるものは会長以下役員の努力である。

町会の仕事が増え、会長は歯科医さんであるが、患者に迷惑をかけることばかりであるが、町会関係のことには何をおいても出ていく。これが本当の滅私奉公であり一億一心であると、欣然と語る。（以下、略）

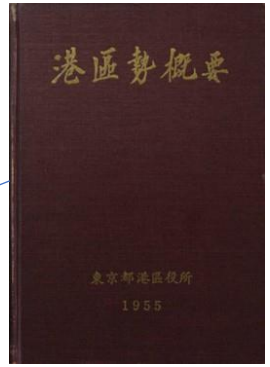
古い文献に書かれた「田島町」(8)　1955

「港区政概要」(昭和30年)

p.406



名称	事務所の在地	代表者	設置地域	会員数
森元町会	麻布森元町1—27 中村方	中村雄一	森元町1—25の1部，27番	280
六本木会	〃 三河台町10 鈴木方	鈴木正夫	六本木町，三河台町	300
今井町親睦会	〃 今井町25 石川方	石川忠治	今井町全域	125
南日ヶ窪町親和会	〃 南日ヶ窪町12小林方	池田富一	南日ヶ窪町全域	189
北日ヶ窪町親和会	〃 北日ヶ窪町14砂田方	馬越宏一	北日ヶ窪町全域	150
材木町親和会	〃 材木町22 澤尾方	澤尾虎男	材木町全域	165
桜田睦会	〃 桜田町27 永本方	永本義夫	麻布桜田町全域	285
霞町防火防犯協会	〃 霞町21 中島方	福原章恒	霞町全域	800
三軒家会	〃 三軒家町41	原芝恒	三軒家町全域	550
仲芋仲よし会	〃 芋町8 新妻方	新妻治郎	芋町1番～54番（31番～45番を除く）	203
麻布防犯協会・火災予防協会南芋支部	〃 〃 125	藤原清八郎	〃 122番～150番 51番～ 45番	110
新芋会	〃 〃 落合方	落合一次郎	〃 61番～66番	200
上芋協力会	〃 〃 68 山田方	山田清太郎	〃 55番～60番，67番～103番，112番，120番，121番	320
広尾町親睦会	〃 広尾町57 陸井方	陸井大郎	広尾町全域	500
宮村会	〃 宮村町63 関岡方	関岡賢一	宮村町全域	452
本村町町会	〃 本村町63 斎藤方	斎藤彦雄	本村町全域	600
田島町睦会	〃 田島町24 三浦方	三浦美雄	田島町全域	120
新一会	新広尾町 1—112 岡村方	岡村昇	新広尾町1丁目112番～114番	35
新広尾2丁目町会	〃 〃 2—108 鈴木方	鈴木篤貴	〃 2丁目7番～116番 129番～146番	140
新広尾町3丁目町会	〃 〃 3—152 岡部方	岡部栄太郎	〃 3丁目80番～95番 152番～165番	220
富士見会	〃 富士見町49 柴山方	橋本又治郎	富士見町1番～53番	270
新堀会	〃 新堀町4 宇賀神方	宇賀神金四郎	新堀町1番～13番	227
竹谷町親睦会	〃 竹谷町1 大橋方	桜部貞次郎	竹谷町全域	300
東町町会	〃 東町29 小池方	小池武男	東町全域	171
山元町町会	〃 山元町55 渡橋方	渡橋角太郎	山元町全域	185
狸下会	〃 狸下町23 篠崎方	篠崎新太郎	狸下町全域	110
網代町町会	〃 網代町8 佐野方	佐野誠吉	網代町全域	220
田町6，7町会	赤坂田町7—1 柴崎方		田町6，7丁目全域	219
田二睦会	〃 〃 2—3 福田方	福田勝男	〃 2丁目全域	38
田一睦会	〃 〃 1—4 桑村方	桑村義郎	〃 1丁目全域	69
福吉防犯協会	〃 福吉町1 菅井方	菅井七司	福吉町全域	360
台町自治会	〃 台町33 菊地方	菊地山三郎	台町全域	314
田町3，4，5町会	〃 田町5—15 水野方	水野健三郎	田町3，4，5丁目全域	209
一ツ木町会	〃 一ツ木町31 戸田方	中西敏二	一ツ木町全域	578
仙石町町会	〃 仙石町1—3 高山方	高山平次郎	仙石町1，2，3丁目全域	202
新町5丁目会	〃 新町5—24 石渡方	石渡秀	新町全域	252
中ノ町新四会	〃 〃 4—5 井口方	井口悟郎	新町4丁目中ノ町全域	263
新三会	〃 〃 3—14 荻野方	荻野勝司	〃 3丁目全域	168
新二会	〃 〃 2—4 矢野方	矢野清太郎	〃 2丁目全域	86
新一睦会	〃 〃 1—4 堀内方	堀内幸一	〃 1丁目全域	68
青山2丁目会	〃 青山南町2—15阿武方	阿武国次	青山南北町2丁目全域	290
青山4丁目会	〃 〃 4—5浅春方	浅春郎方	〃 4丁目全域	340



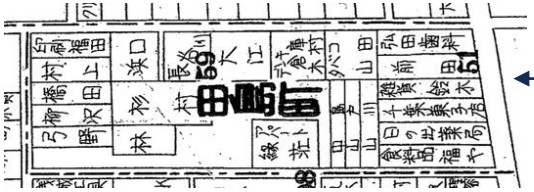
[国立国会図書館所蔵]

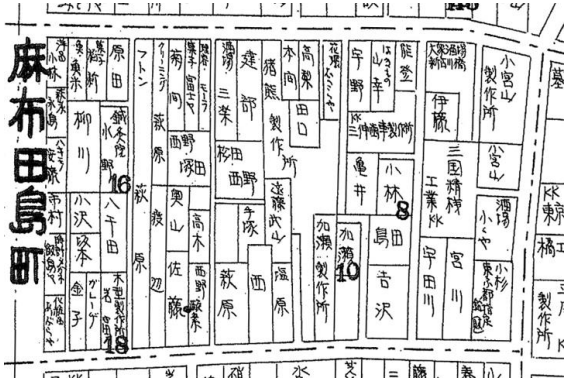
名称	田島町睦会
所在地	麻布田島町24 三浦方
代表者	三浦美雄
設置地域	田島町全域
会員数	120

古い文献に書かれた「田島町」(9)

「住宅案内図帳」（昭和34年）1959

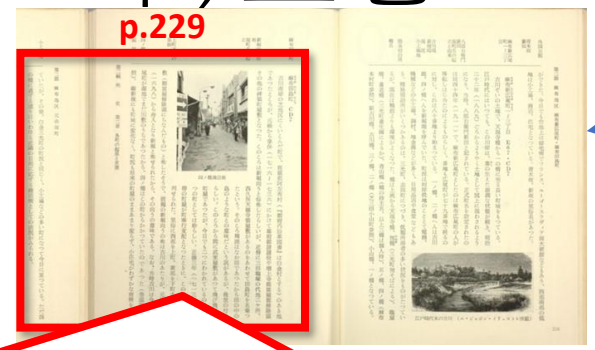
[国立国会図書館所蔵]

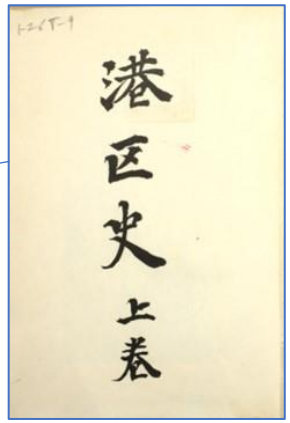




古い文献に書かれた「田島町」(10) 1960

「港区史」(昭和35年)上巻





[国立国会図書館所蔵]

麻布田島町　古川南岸の芝地区に食い込んだ町で、荏原郡阿左布村のあき地であったところが、元禄から享保（一七一六～一七三六）にかけて幕府御諸請役や増上寺御霊屋御掃除頭その他の拝領町屋敷となった。このころは新堀向うと俗称したらしいが、近傍に三田亀塚の代地二ヶ所、西久保天徳寺領屋敷があるのを合わせて田島町を名乗ったという。そのころ周囲はなお田であったから田の中の島のような町との意味だという説があるが、後世の付会らしい。このころから間に武家屋敷があって飛び飛びに町屋であったが、今日でも二つに分かれているのは、一つの町としては珍しい。正徳三年（一七一三）麻布一帯の町屋が町奉行支配となったときに、この町も市中に列せられた。里俗に西部を上町、頭部を下町または箒屋敷（御霊屋掃除頭にちなんだもの）と称したそうで、前掲の新堀向うの称は古川の辺りが、元禄十一年（一六九八）から舟入となり新堀と称せられたから、その向うの意味である。なお、当時古川は今の新広尾町が湿地でまだ川敷のうちであったから、四の橋はこの町からかかっていたのであった。維新後にも町域に変化なく、町況も旧来の町やのままあまり変わらず、小住宅がわずかな市街をなしていたが、その後、白金三光町の町況と同じく、小工場などの多い町になって今日に至っている。ただ四の橋に通ずる通りはいわゆる近隣の日用に応ずる商店街としての活況がみられる。

古い文献に書かれた「田島町」(11)

第3工場：田島町32番地

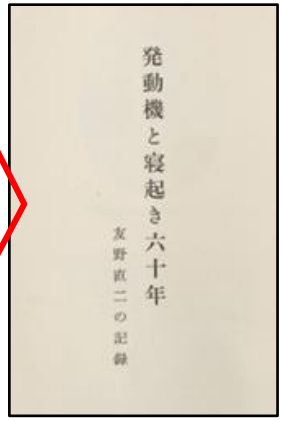
友野鉄工所社長友野直二氏

「大衆人事録 第16版全国篇」1953（昭和28年）

友野直二　友野鐵工所社長　東亜氣化器製作所各社長

港區高濱町七　歴明治四十一年工業專修大機械科電氣科卒同四十三年中大外語專科卒昭和八年麻布區議に當選副議長就任同十一年六月東京府會議員當選同十二年麻布區會議員再選區會議長を經て同十五年再び東京都議會議員となり同廿二年任期滿了尚明治四十四年友野鐵工所を創立し發動機の製作に從事堅年事業經營を改組社長に就任今日に至る現職株友野鐵工所社長株東亜氣化器製作所社長東京内燃機協議會會長日本發動機會副會長同榮信用組合理事等先に昭和十五年帝國發明協會より發動機發明に關する優等賞及同十八年紺綬褒章を受け昭和六年今上陛下國霊號鶴の思召により葉山御用邸用船三浦丸に同社製發動機を採用同廿四年同御用船再建造に際し再度用命を受く　閨日蹟宗　鎧純日本麻味刀劍類　閨妻とみ明三三年千葉縣江見町川名家出身　長男直久天一〇日本大學卒友野鐵工所設計課長同取締役　同妻いく子昭三秋田縣横堀町湯澤高女卒同地素封家小山田八郎八女　孫法子昭二三　二男尚文天一四日大工科卒フレンドモーター社長（小型發動機製造）二女妙子昭三都立六高女卒　三男工司昭四横濱高工專門校卒　長女和子夫人南品川杏林堂病院小川五月醫師（日大醫學部卒）の妻

「発動機と寝起き六十年-友野直二の記録-」（昭和37年）1962



発動機と寝起き六十年

友野直二の記録

[国立国会図書館所蔵]

天皇陛下の海洋生物のご採集は、今日では世界的にも有名である。その御座船の発動機のご用命を一度ならず二度までも承ったのが友野直二氏である。まことに発動機や冥加というべきである。

御下命の最初は昭和六年の春で、東京麻布の四ノ橋電車停留所前に工場があった。社主の友野直二氏はご下命の光栄に感激し、四十二歳の情熱を傾けて、ご用命の発動機の謹製に当った。編者が初めて友野氏にお目にかかったのは、丁度その頃であった。

あれから算えても三十有余年の年月が過ぎている。今日、友野氏は第一線から退き、悠々自適、好きな漢書をひもとき、刀剣を鑑賞し、折に触れては社寺古跡に杖をひくなど、古武士的な明け暮れである。

しかし、自ら「発動機と寝起きを共に六十年」と術懐するごとく、友野氏の脳中に去来するものは、今でも「石油発動機」の映像ではなかろうか。

今日、舶用電気着火機関の創始者と評される友野氏である。この創始者が自分の体で綴った歴史の記録は尊いものである。

「貴方が、石油発動機の製造に、永い一生を打ち込まれた動機は、一たい何でしょう」「それはね、私の父が石油発動機を使っていて、故障ばかりで、ほとほと手を焚いているのを、子供ながら見ていた。早く大人になって何とか手助けをしてやりたいものだと思ったね」

古い文献に書かれた「田島町」(12)

1963

「田島町町会会員名簿」(昭和38年)

[田島町町会所蔵]

発刊のことば

麻布田島町々会長
三浦　美雄

この度田島町会員名簿が装いも新たに発刊のはこびを見まして、今日皆様のお手元にお届けできますことは誠に喜ばしいことであります。

伝統ある田島町睦会も、昭和三十六年六月田島町会館の落成と共に名称も田島町町会として再発足いたしましたが、その間町の発展と同時に会員数も増加の一途をたどり、また若干の異動等もありましたので新しい名簿の作成を必要とされておりました。

このたび名簿作製にあたり担当者一同、不慣れではありますが、少しでも会員の方々が日常お役に立つものを作るべく努力いたしましたもので、いささかでもご利用願えれば幸いと存じます。

作製に当り会員の皆さま、役員の方々の絶大なるご協力と関係官公署及び隣接各町より寄せられましたご厚情に対し、深く感謝の意を表しまして発刊のことばといたします。